

時に両手を後に伸ばす。一緒に立ち上らないで、順序よく一羽づつ立つことに注意する。

「間奏(後奏)」 羽を振つて歩きながら、一番後の雀が先頭にたつて位置を交換し、大體三回繰返し行ふ。

### 飛行機

隊形。一列圓形になる。

「前奏」 そのまゝ聞く。

### 一節

「ブン〜〜〜〜ブン〜〜〜」 右を向き、飛行機のプロペラの様に、両手を交互にくるくる廻しながら、圓周上を右へ跼足で進む。

「飛行機とぶよ」 両手を今と反対にくる〜〜廻しながら、元の位置まで跼足で後退する。

「キラ〜〜〜〜翼が光る」 両手を真ぐ横に伸ばして翼を擴げ、始めの四呼間各自の廻りを右に一廻りし、次の四呼間反対に廻る。

「萬々歳」 二呼間に左足、右足と足踏みをすると共に、二拍手し、最後に両手を高く舉げて胸を張り萬々歳をする。

### 二節

「ブン〜〜〜〜ブン〜〜〜」 飛行機早い」 一節の飛行機とぶよ、までと同じ動作。

「あの村あの町見る間に越えて」 始めの四呼間跼足で圓心に進みながら、両手を肩の位置より下におろし、再びなめらかに、そりかへる様に上にあげる。次の四呼間、後退しながら上にあげた

両手を前から下に下におろし、横に擴げる。

「雲の中」 一節と同じく、二拍手足踏みをした後、両手を高く舉げて萬々歳をする。

これは二拍子で  $\text{p p p p} | \text{p p p p} |$  のリズムのみから成つてゐる曲でありますから、このリズムに合はせて  $\text{♪}$  を一步とする正確な跼足をしながら、両手の動作に注意したい。

## 観 察

### 清水光子

節分 節分といへばすぐ豆撒きと、たゞそれだけの行事にならない様にこの日の意味をお話としてまづきかせ度いものである。曆の上ではこの日の次からは春といふことであつてもまだ中々にさむさは緩やかにならない、けれどもうそこに來てゐる春である。どうやら空も春めいて來て日向が驚く程暖かくなる。かげぼうしをみつめてしばらくして青い空をみて影の通りに白い像が空にうつろのなみたりするのもこの頃であらう。垣根の根もとに思ひがけなく青い草をみつけるのもこの頃であらう。そんな時はまだ芽のかたい落葉樹のそばへ行つて芽の様子をみ乍らこの中には葉になつたり花になつたりする小さいものがあること大事にするやうにしやうなどゝ話し合ふやうにしたい。そして時々みめてはその芽の段々に大きくなるのを注意してゐるやうにする。

お豆を撒くのは大切な食料品をむだにするやうでどうであらうか。行事として楽しませ度い爲になら粘土が何かで代用しても充

分であらう。紙のお三寶を紙の袴をつけた幼児がもつて粘土のまめを元氣よくぶつけたならぞんない鬼も悪も退散するだらう。

數について 節分の時豆を年の數だけ食べるといふ習慣がある。五つか六つか七つか、自分の年の數(或數だけのお豆(もの)を數へわけることをこんな機會からしてみるのもよい事だと思ふ。

もつとも前から何かを數へるといふことは保育のあらゆる方面で行はれてゐるのではあるけれど、數として抽き出してしてみることもあつていゝであらう。しかし言ふまでもなく遊びとして、具體數を扱ふのである。これも今更言ふまでもないがたゞ順序數だけを百まで唱へてそれで數觀念の養成だといふやうなことはないやうに。具體的なものを數へることが第一である。であるから五つ迄位の數を具體的に縱横に消化したならこの年齢の子どもとして全く充分ではないかと思はれる。一例を挙げるとお豆を五ついたゞきました、三つ食べました、あといくつあるでせうね、數へてみませう。或は四つのお豆を小さい弟と半分づゝしたらいくつでせう。とかいふ程度に物と數を一しよにして、強ひて抽象數にしないでよいであらう。五つの中からいくつが引いたら三つになつた、いくつ引いたかといふ程度の抽象化ならばよいであらうけれど。又寶物を數へる時に段々に物による唱へ方も指導する様にし度い。鉛筆なら一本二本、本なら一冊二冊といふ様に、とにかく數を數として教へるといふ様でなく、遊びの中に數へ、數に關する興味を養ふやうにしたい。

勳章 紀元節のお話に關聯して金鵄勳章のお話が出る。又兵隊ごつこの勳章をこしらへたりする時勳章の繪や寫眞をみて作るこ

とにする。そして長くも陛下がお國の爲にてがらのあつた者に下し給ふものであることを話すことは勿論である。いつだつたか電車に乗つてゐたら若い傷痍軍人章をつけた人が乗つて來られたので急いで席を立つたところが女學生が知らずにこしかけてしまつた。その方はだまつてゐられたが私は無言でその方の記章を指しただけれど女學生は解せないやうな顔付をしてゐたがその方が「いやよろしいのです」と仰言つたのでしぶ／＼立上つた。私は何も言へないでたゞなまげなく赤面した。幼児であつてもそんなことのないやうにしたいとつく／＼思つたことであつた。

貝 お雛様にははまぐりやさゞをよくお供へする。又この頃から大潮が近くて貝類が獲れる。そんなことから貝がらをみる機會がつくられる。はまぐり、あさり、しじみなどごく普通のものの貝がらで遊ぶ。數へてじやけん取りをしたり、かぶせつこをしたりおはじきしたりして遊ぶうちに貝がらのもようや手ざわりなどに注意するやうにする。そして模様と同じたゞ一組のものがびつたり合ふのだといふことを子どもたちに合せてみさせて遊ばせ乍ら注意する。又その他さゞやたから貝とかほたて貝とかきさごとかかきふものもあつたらもつて遊ばせる。「標本になつたやうなものなわざ／＼みせるにも及ばないけれど繪本などによい繪があつたらこんな珍らしい貝もあるのだといふことを海への關心につけてみせることはよいと思ふ。砂場の砂の中や砂利の中にたまたかいた貝殻をみつけると寶物のやうに大切に拾ふ子ども達で、貝殻遊びはおもしろみあるものである。